

「安全地帯」からはみ出る

仏教(あるいは他の宗教、哲学でも同じことですが)の歴史上に既に現れている様々な概念の定義、意味を勉強して、それを整理し、アレンジして解説する。あるいは、ほんの少し違う意見を言ったりするだけだったら、ある意味安心な行為です。誰もが十分に馴染んでいる「概念体系」のなかの出来事だから。つまり「概念体系」という建物は揺るぎもしないことを確認したうえで、それにすっかり乗かった、安全地帯での多少の遊びだから。

ところが、『進みと安らい』を書き上げた直後の内山老師は、どうも自分はその「安全地帯」からはみ出てしまった、と感じられたのではないのか？くり返しますが、「アタマと生命」という言葉自体は、普通にありふれたもので、たぶん多くの人がそれぞれの理解する「アタマと生命」のことだと受け取り、それは世界がひっくり返るほどドキドキするような性質のものではないでしょう。でも他人の解釈ではなく、内山老師ご自身がその言葉を使い指し示そうとしたものは、どうもそれまで日本仏教の伝統が、長い年月をかけて緻密に作り上げてきた概念体系に、収まりきらない。どうやら自分は「未踏の地」に踏み込んでしまったようだという老師の正直なお気持ちが、あの「あとがき」から、私には聞こえてくるのです。

そこには少しばかりの「当惑」もあったのでは？何故「当惑」などと、下手をすれば失礼になりかねない言葉を使うかという、内山老師ご自身、この『進みと安らい』で発見された「アタマと生命」という鉱脈の追求を一時的に中断されたからです。つまり、それほど「アタマと生命」という鉱脈のもつ衝撃度は、内山老師ご自身の手にすら余るほどのものだったのです。

そのあたりの事情を、安泰寺住職のネルケ無方さんが、推薦文のなかでこう指摘します。

「内山老師は本書を「まだ掘り下げが足りない」と自身で感じて絶版にしたという。その理由とは？老師が墓場まで持っていこうとした幻の作品がついに復刊！」

こう判断する根拠として、ネルケさんは内山老師の晩年の言葉を引用します。

「とまあこういった漫画を二十年くらい前に描いたわけだ。この話はこれで結構面白いのですが、本当からいったら娑婆世界はまちまち差別、それに対して仏教は平等すべてブツ続きという話にならなければならない。ところが私の漫画だといのちとしては屁一発別々

で、頭としては通じ合うというのだから、仏教の話とは正反対になってしまう。それで私自身いきづまって、しょうがない、そのままこの話はお倉入りでいつか二十年もたってしまった。」

内山興正『発無上心を味わう』（初版1994年 p 36）

以上の『進みと安らい』が書かれて二十五年後の内山老師の述懐が、すべてを物語っています。どういことでしょうか？

山下良道 令和の時代の「仏教3.0」(1) サンガジャパン33 p.278~279